

「娘からの贈り物」

福岡県 山本 築様

小学二年生になった娘がお弁当を作りたいと言いだしたのは、三週間前のある朝のことだった。いつものように三人で食卓を囲んでいると、パンにバターを塗っていた手を止めて、サンドイッチを作る、と言った。突然のことに驚いた私はポットのお湯を注ぎながら妻に目配せをした。すると、「いつものお返しだもんね」と娘の言葉を補足するように妻が言葉を足した。

去年、ひよんなことから娘にお弁当を作って以来、娘にせがまれて度々同じものを作るようになっていた。といっても、玉子焼きや海苔おにぎりなど簡単なものばかりだったが、その彩りを添えるために花ソーセージを加えていた。その花ソーセージが娘の大好物で、私は表面に薄く焦げ目が付くくらい焼いたものが好みだったが、娘はさくら色が可愛いと火を通さずにそのまま食べていた。

「それは楽しみだなあ。じゃあせっかくだし、どこか出掛けようか」

娘の言葉に気分を良くした私は、そのお弁当を食べるために遠出の計画を立て、車で一時間ほどのところにある遊園地に出掛けることにした。

当日は天気恵まれ、遊園地は多くの人で賑わっていた。が、私の意識は娘が作ったお弁当について傾きがちだった。それは娘も同じらしく、三人分のお弁当箱を大事そうに胸のあたりで抱えながら、母親にしきりに時間を尋ねては宥められている。私たちは幾分そわそわしながら時間が過ぎるのを待った。

ようやくお昼の時間になると、私たちは芝生の上にレジャーシートを広げた。妻は水筒から暖かいお茶を注ぎ、お弁当箱を囲むような形で座った私たちに配った。私は包みが解かれた小ぶりのお弁当箱にカメラを向けてそのふたが開くのを待っていた。娘の成長の記録としてはじめての手料理を写真に収めるのは父親として大切な役割に違いなかった。ここにきて娘はしばらく恥ずかしそうに私たちの顔を覗いたりしていたが、やがて妻に促されるようにお弁当箱のふたを取って中身がよく見えるようにこちらに傾けた。

お弁当箱のなかには小さく切られた食パンとそこからはみ出すような格好で不揃いの野菜と花ソーセージが挟まれていた。花ソーセージは少し焦げ目が付けられ、玉子と海苔でライオンの顔をつくっていた。私がカメラを向けると娘は照れたように笑い、妻に頭を撫でられると目を細めて満足そうな表情を浮かべた。娘が作ったサンドイッチは決して形が整っているとは言えなかった。しかしその分、朝から早起きして作った娘の一生懸命が伝わるものだった。私はほとんど感動したように言葉に詰まり、すぐに褒めて上げることができなかった。そのかわり、娘とその手元のお弁当に向けて夢中でシャッターを押した。

「写真はもういいから早く食べてよ」

私は妻と娘に急かされるようにしてサンドイッチに手を伸ばし、すでに胸がいっぱいになっているなかにゆっくりと流し込んだ。それは保冷剤とともにお弁当箱に収まっていたにもかかわらず温かい味がした。私とその余韻にひたっていると娘は待ち遠しそうに二つ目を差し出して笑った。

そのときの写真は現在も居間のテレビ台の上に飾られている。そこには花ソーセージと一緒に恥ずかしそうに笑う娘の笑顔が写っている。